

「何するんだよ！痛いじゃないか！」

[illegible]

3 買ったばかりの揚げ物の無事に安堵しながら、俺は店主を睨んだ。店主は頭を掻いている。

「……子供？」  
「あれは、お客さん。ご存じありませんか？ あれはコネコビットですよ」  
小さな後姿は、夕暮れの道を見る間に遠ざかっていた。

ネコだって王様を見ることができる

以<sup>り</sup>降<sup>ろ</sup>に<sup>て</sup>続<sup>つ</sup>く<sup>は</sup>一<sup>い</sup>連<sup>れ</sup>の<sup>を</sup>文<sup>を</sup>の<sup>を</sup>享<sup>う</sup>け<sup>る</sup>作<sup>し</sup>者<sup>の</sup>勝<sup>か</sup>ち<sup>を</sup>手<sup>で</sup>解<sup>く</sup>な<sup>が</sup>な<sup>が</sup>概<sup>くわい</sup>解<sup>かい</sup>に<sup>て</sup>過<sup>か</sup>ぎ<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>て</sup>せ

『ネコト』は多くの創作の方々に共有されてゐる。

ネコだって王様を見ることが出来る

悪い」と思ったのだらう。店主は、ビールを半ダース買った俺にワインを一本進呈してくれた。投げ売りのワインだが、料理酒には充分である。ありがたく貰い受け、家路を急いだ。

「それ美味しい？」

住宅街に差しかかり、街灯が点つているだけの道である。急に声をかけられ、俺は飛び上がりそうになった。

振り向いた俺の目は、不可思議な造形を捉えている。一番近いものは、二足歩行に擬人化した動物のぬいぐるみ

5  
 だろうか。その生き物は俺の持つている袋を凝視していた  
 空腹を表す音が辺りへ響く。  
 「……食べる？」  
 尋ねる俺に頷いていた。

俺の家は一軒家である。祖父が土地を取得した当時、この辺りは野原の広がる僻地だった。そこへ父が家を建てる。定年を機に両親は郊外へ移り、勤務先の利便で俺だけが、この家に残された。『唐揚げ。もつと食へたい』

ネコだって王様を見ることができる

「それ、それで、その爺さんになにに人間になににたいてって頼んだのかう？」

[illegible][illegible][illegible]

「いんはていせいふへいす」

[illegible]

ネコだって王様を見ることができ

[illegible]

自然保護団体の質疑応答事例によれば、コネコビトは人

満腹になり、眠気のさしていたコネコは、自分の発言を正確に覚えていなかった。

「お爺ちゃんですと一緒になっていたって頼んだけど、『旅がサダメ』だから駄目だね」

コネコの話は不明点が多い。だが、一番の問題は、保護者が必要な立場にも拘らず、単独で生活している事実だ。

「……考えたんだが、この団体に行ってみたらどうだ？」

食べさせてくれるらしいぞ」

自然保護団体のホームページが表示された画面をコネコに見せる。

「神奈川。……江の島のほうだな。ここからだ」と電車を乗り継いで二時間くらいか」

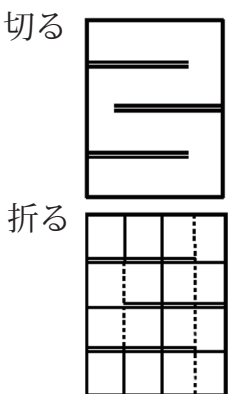
コネコは頭を振った。

「駄目。お爺ちゃんが戻つて来たら、一緒に行くから」

年寄り猫と春に再会する約束だと言う。コネコの決心が変わらなければ、同行を許可してくれるのだぞうだ。

「春まで半年は先だぞ。本当に迎えるにくるんだろな？」  
俺は空の皿を片しつつ、ため息を吐く。台所の窓から覗く庭の一角でネコジャラシが風に揺れていた。(了)

※王様の絵が上になります



----- 谷折り  
(c) 2014 楠樹 暖

ネコだって王様を見ることができる

ネコだって王様を見ることができる